

泉州地区木帆船時代の漁業生産技術

—大岫と祥芝のフィールドワークに基づいて—

Fisheries Production Technology in the Quanzhou Area during the Era of Wooden Sailboats:
From Field Studies in Dazuo and Xiangzhi

王 亦錚

(張 昌昌 訳・小熊 誠 監訳)

WANG Yizheng

(Translated by ZHANG Chang Chang, with supervision by OGUMA Makoto)

要 旨

だれでも知っているように、福建省東南部に位置する泉州は昔から海上交通、造船、漁業が発達している沿岸都市である。泉州の漁民は海を田にして、長期に海洋と付き合う過程において、多くの当地に適用する漁業生産技術と道具を創造し、今まで続いてきた。本稿は大岫村と祥芝鎮のフィールドワーク資料に基づいて、地方志史料と結びつけ、漁民の季節性漁労と関連する漁期、魚類および魚場、伝統的な釣具、網具および漁船、漁労の具体的な操作過程などの方面から始め、泉州地区における木帆船時代の漁業生産について深く討論する。

【キーワード】 泉州、大岫村、祥芝鎮、フィールドワーク、伝統漁業

1. 前書き

中国の沿海における伝統漁業の歴史は非常に悠久であり、原始時代までさかのぼることができるが、真の海洋漁業の発展は船の使用からである。造船技術の発展に伴い、沿海漁民の海洋の利用もさかんになり、長期の生産実践の中で豊かな経験を積み重ね、さまざまな漁労技術と道具を創造した。しかし、中国沿海線の各地区の地理環境、気候、魚類などの要素が違うので、使われる道具と漁労方法も異なる。たとえば、閩粵地区一帯は主にトロール漁業、釣り業であり、浙江・江蘇地区一帯は主にトロール、張網（定置網）、流網であり、山東・河北地区では風網（刺し網）、流網、釣り漁業が盛んである。本稿の研究は木帆船時代の漁業生産技術であるが、各地の漁労技術と道具が非常に多く、いちいち紹介するわけにはいかないので、研究の範囲を福建省の泉州地区に絞って、フィールドワークに基づいて文献資料と結びつけて、木帆船時代の伝統的漁業生産技術の具体的な操作過程を中心に討論する。

2. フィールドワークの概況

泉州は中国福建省東南部に位置し、昔から海上交通、漁業、造船が発達した沿岸都市である。今回調査研究する地区は、惠安県崇武鎮の大岞村および石獅市の祥芝鎮である。

大岞村は崇武半島の一番東にあり、東海と南海の境に接している場所である。その地形は漏斗のようであり、天然の良港を形成し、崇武国家一級漁港の所在地である。『惠安県志』によると、「五代の時（907-960年）、沿海で漁課が設立され、大岞の漁業はある程度発展した……南宋時期、獺窟、大岞の漁業はある一定の規模にあった。明の嘉靖年間（1522-1566）、漁業は専門化していった。清の道光年間（1821-1850）漁船は500隻あまりあった。民国25（1936）年、全県の漁船は1,000隻あまり、漁民は1万人あまりで、年間生産量は1.1万トンであった。」⁽¹⁾ このことから分かるように、大岞村の漁業生産の歴史はたいへん古い。今回の調査研究で訪問した張国輝氏は1946年生まれで、若い時に漁民の生活を経験した。長期に木帆船の製造に従事したが、伝統的な漁業生産についても大変よく分かっている。

もう一つの調査地祥芝鎮は、泉州湾入り口の祥芝半島に位置する。三面を海に囲まれており、東は台湾海峡に臨み、崇武半島は海を隔てて眺める。現在は中国における一級規模の最大の漁村である。『晋江市志』に記載し、「南宋時代、晋江県祥芝の漁民は、定置網作業の方法をみ出した。」⁽²⁾ これにより、祥芝鎮の漁業発展は比較的早いということが分かる。今回の話者蔡久芳氏は、1944年生まれで、中学校中退だった。祖先の仕事は討海（地元の閩南方言で漁業を意味する）、運輸業であった。1960年代、中学校を卒業する前に祥芝漁業社の仕事に参加し、見習いとして海に出た。1964年に軍隊に入り、5年間、兵士になった。退役してから漁業社に戻り、広東、舟山、閩東各魚場で、機帆船の機関員、通信員を担任していた。討海（漁業）の経歴は非常に豊富で、今回の調査研究に多くの伝統的漁業生産の情報を提供してくれた。

ここまでをまとめると、大岞村と祥芝鎮の漁業発展の歴史は古く、その伝統的な漁業生産技術が今まで続いており、伝承の脈絡もはっきりしている。このことは、泉州地区の木帆船時代の漁業生産技術を明らかにすることに役立つことは疑いなく、調査の間に筆者も漁業生産の詳しい過程を理解するよう注意した。

3. 魚場、漁期および漁業資源

泉州沿海漁民は数千年の探索に伴い、各海域の漁業資源を理解し続けており、1年を単位としての科学的な漁労周期が形成された。『惠安政書』によると、「崇武沿海の軍隊と民衆は、漁労をして暮らしを立てている。冬季と春季は綸帶魚、夏の初期は浮大縄（浮大網）で馬鮫、鯊、鯧、竹魚など、夏の中期は鰲撒縄、鯧縄、秋の中期は旋網で金鱗、鯉、毒等。魚は四時の気によって生まれ、四時の気によって至る。漁民は随時に網を広げ、これを待つ。確かに水の隣に住めば、魚の習性がよくわかる！」⁽³⁾ これにより、崇武地区の漁民は遅くとも明代後期に季節性の漁労を行い始め、各魚類の生活習性を知るため、各季節に異なる魚場で漁労作業を行ったことがわかる。この伝統は今まで続いている。

近代中国沿海の魚場は、ほぼ北部、中部と南部という三大魚場に分類される。北部は遼寧、河北、山東三省を含み、渤海、黄海の漁区である。中部は江蘇、浙江両省を含み、黄海、東海の漁区である⁽⁴⁾。南部は福建、広東、台湾三省を含み、東海、南海の漁区である。南部魚場は泉州沿海

漁民の最も重要な漁業生産の基地である。昔から、泉州沿海の漁民たちは、この海域で漁業生産を行っており、この海域の物産について深い理解を持っている。「崇武所城志」によると、「東西澳、后海澳、人各沿海步拖大网、施罟网、取小鱼、乌鱼、鲈、鲙、鲷、鲫、白丁虾、锁管、卫螺、香罟螺之属、难以名举。海边有屿、南曰龟屿、西曰洋屿、东曰磨石屿、北曰青屿……此四屿、大小男妇于潮退时用铁钩取砺房、仙掌、螺、石乳、紫菜、赤菜、青苔之属。又沙中步取车螯、蛤蚌、西施舌、王螺、白章鱼、石巨之属。」（「東西澳、後海澳では沿岸で、拖大網、施罟網によって小魚、烏魚、鱸、鱈、鮓、鮒、白丁蝦、鎖管、衛螺、香罟螺に属すものを捕り、名を挙げるのは難しい。海辺に南曰亀嶋、西曰洋嶋、東曰磨石嶋、北曰青嶋の4島があり、干潮時に子供や女が鉄鉤で砺房、仙掌、螺、石乳、紫菜、赤菜、青苔等を採取している。また、徒歩で砂の中から車螯、蛤蚌、西施舌、王螺、白章魚、石巨等を取っている。）」⁽⁵⁾ 各地方志において、本地の漁業資源を皆記載しているの、ここではいちいち紹介しない。

北部と中部漁場と比べ、南部漁場は海壇島、万山群島と西沙、南沙群島以外に、他の区域の沿海島嶼が少なく、魚類資源も希少である。そのため、泉州沿海の漁民は昔から省をまたがって漁労する伝統がある。『晋江市志』によると、明清時期、深滬、科任の漁民は季節により浙江魚場に移動し、タチウオを釣った（起冬あるいは転浙という）⁽⁶⁾。清の道光年間『厦門志』にも以下のように記されている：「嘉慶十七年，奉督宪文行，闽省单桅、双桅渔船，本省出鱼稀少，许往浙江舟山等处采捕，不许越赴江南省，违者治以越境之罪，船只变价入官。」⁽⁷⁾（「嘉慶十七年、奉督の命により閩省（福建省）では帆柱が1本、2本の漁船が用いられ、福建省では漁が少ないので、浙江省舟山等への出漁が許可された。江南省への出漁は許可されず、越境した違反者の罪は、時価で船を没収された。」）

大岬村の張氏と祥芝鎮の蔡氏の訪問調査を通して、泉州漁民の季節的な漁労によって選ぶ漁場および主に捕る魚類がよく分かる：

農曆2月：アモイ海域で白魚（帶魚—タチウオ）を釣る。

農曆3月：閩東海域で白鯧魚、黄魚および他の雑魚を捕る。

農曆4月：短い暫定的期間に漁具直しと補給をしてから、台湾海峡で黒鯧魚を捕る。

農曆5-6月：禁漁期。

農曆7-8月：舟山群島で白魚を釣り、12月まで行なう。立秋以後、日本海峡へ赴き、魚を捕る漁船もある。

農曆9月：漁業生産前の準備

農曆10月：台北海域で雑魚を捕る。

農曆11月-1月：台湾海峡で放大緋（延縄）で鯊魚（サメ）を捕る。

以上の内容は、泉州沿海漁民が1年のうちに漁労を行う過程であり、漁民生活の一面が見える。しかし、この資料は完全ではないが、少なくとも公社化時期、中部魚場の各大小の魚場で、泉州漁民の足跡を残したと言える。

下表は、『福建省群衆漁業魚場図集』⁽⁸⁾の内容を参照し、泉州沿海漁民の周期的な漁労について全面的に了解できる。

表1 漁期、魚場および主に捕れる魚類

漁場	漁期	春の漁獲期 (3-6月)	夏の漁獲期 (7-9月)	秋の漁獲期 (10-11月)	冬の漁獲期 (12-2月)
呂泗漁場	魚資源	大黄魚、小黄魚			
嵎泗漁場		大黄魚、小黄魚、乌賊	带魚、鲑魚、藍圓鰻、 舵鯉、金色小沙丁魚	带魚、鲑魚、藍圓鰻、 舵鯉、金色小沙丁魚	带魚
岱巨漁場		大黄魚、小黄魚			
洋鞍漁場		大黄魚、小黄魚、乌賊、 鲑魚、藍圓鰻	带魚、鲑魚、藍圓鰻、 金色小沙丁魚、舵鯉	带魚、鲑魚、藍圓鰻、 舵鯉	带魚、鲑魚、藍圓鰻、 舵鯉
魚山漁場		鲑魚、藍圓鰻、大黄魚、 小黄魚、乌賊、銀鯧	带魚、鲑魚、藍圓鰻、 金色小沙丁魚	带魚、鲑魚、藍圓鰻、 舵鯉	带魚、鲑魚、藍圓鰻、 舵鯉
大陳漁場		鲑魚、藍圓鰻、大黄魚、 小黄魚、乌賊、銀鯧	带魚、鲑魚、藍圓鰻、 金色小沙丁魚、舵鯉		带魚、鲑魚、藍圓鰻、 舵鯉、金色小沙丁魚
南北麋漁場		大黄魚、小黄魚、乌賊、 銀鯧	鲑魚、藍圓鰻、金色小 沙丁魚、舵鯉		带魚、鲑魚、藍圓鰻、 舵鯉
閩東漁場		大黄魚、小黄魚、鱒魚、 銀鯧、馬鮫、乌賊、 姥鮫、鰻魚、鮑魚、 鲑魚、藍圓鰻、带魚、 小公魚、毛蝦	鯉鰻魚、青鱗魚、三 角魚、小公魚、銀鯧、 鱒魚、梅童魚、对蝦	大黄魚、鮑魚、海蜆、 梭子蟹、梅童魚、鱒魚	大黄魚、带魚、梭子蟹、 毛蝦、沙魚(鯊魚)、 鰻魚、藍圓鰻、鲑魚、 舵鯉
閩中漁場		大黄魚、銀鯧、乌賊、 沙魚、带魚、鱒魚、 鰻魚、馬鮫、毛蝦	鯉鰻魚、乌鯧、沙魚、 鱒魚、三角魚、小公魚、 梅童魚	海蜆、鯛魚、沙魚、 海鯨	大黄魚、带魚、藍圓鰻、 鲑魚、鯛魚、鰻魚、 乌賊、梭子蟹、毛蝦、 小公魚
閩南漁場		带魚、大黄魚、藍圓鰻、 舵鯉、鲑魚、乌賊、 馬鮫、鱒魚、沙魚	鯉鰻魚、三角魚、鲑魚、 乌鯧、青鱗魚、鱒魚、 沙魚	大黄魚、鯛魚、狗母魚、 鮑魚、沙魚	梭子蟹、鰻魚、带魚、 鯛魚、沙魚、毛蝦、 乌賊
粵東漁場		藍圓鰻、金色小沙丁 魚、脂眼蚌、眼鏡魚、 三角魚、鰻魚、带魚、 大黄魚、沙魚、銀鯧、 鱒魚、馬鮫、蛇鯔、 鯛魚	鯉鰻魚、三角魚、鲑魚	鯉鰻魚、三角魚、大 黄魚、海鯨、鰻魚、 蛇鯔、鯛魚、对蝦	藍圓鰻、金色小沙丁 魚、鲑魚、竹莢魚、 沙魚、蛇鯔、鯛魚

※訳注：縦と横の項目は日本語に訳した。しかし、内部の魚名は中国語とした。

4. 伝統的漁労技術

北宋時期、晋江県深滬と惠安県崇武の漁民は、釣具の作業を始めた。南宋時代、晋江県祥芝の漁民は定置網を始めた。さまざまな地方志にそれが記載されており、フィールドワークの内容と合わせて、泉州沿海地区の漁村で木帆船時代に使った伝統的漁労技術は、ほぼ以下の数種類である。

1) 釣具

釣具は延縄釣、手釣と竿釣の3種類であり、その中で延縄釣が一番使われ最も重要である。延縄釣はこの地方で緄と言われ、釣る魚により、白魚緄、五沈五浮、鯊魚緄、小花緄(鰻魚緄)、紅瓜魚緄(大、小黄花魚)と沈緄(定置単鉤延縄釣)などによって分かれる。緄の様式は大体同じであ

り、招花、浮筒、花縄、緞身、繚脚、銀絲、釣鉤、浮子、沈子を組み合わせて作られる。招花は水面に浮かぶ旗であり、標識の役割がある。浮筒は招花と合わせて一つになり、ブイになる。浮筒と緞身を結びつけるものは花縄であり、筒縄とも言い、水中の深度によって緞身を調節できる。緞身は繚脚、浮子、銀絲、沈子、釣鉤を結びつける縄であり、竹篾、竹皮と稲わらを主な材料として製造された。まず竹を竹篾、竹皮に割く。数本の竹篾を縛って1本にし、竹皮でそれを包み、さらに稲わらで縛り上げ、丈夫な縄ができ、緞身として使える。他の用途の縄は、製作方法が大体同じであり、カラムシで作られる縄もある。緞身に括られる数本の垂直向きの縄は繚脚と言われる。繚脚と釣り針を銀絲で結びつけ、伝統的な銀絲が銅線で作られ、現在はステンレス製である。浮子の作用は浮力を増すことであり、使う時に緞身につるす。沈子は碇とも言え、その作用は船碇と同じである。緞身を安定させ、緞身に対する水流の影響を減少し、その浮動の幅を大きくしないためである。緞は、浮緞と定緞の二つ種類がある。碇が鉄製なら定緞といい、水流に伴って移動することがない。小さい定緞は、竹碇を使う。竹碇の長さは一般的に30-40 cmであり、その上端に穴があり、石を置き、重量を増やす。定緞は一般的に土層土質の海底に近い各魚類を捕る。浮緞に使う碇は、特にこだわりがなく、重量がよければ、道で拾った石でも使うことができる。浮緞は水流に伴って動き、筒縄を通じて深度が調節できる。緞の用途の差異は、細かい部分にある。以下に簡単に例を挙げる：

白魚緞：釣り針は刺（カエシ）がない。この地方の計量方式により、緞1本は5籃に等しい。つまり、緞数本で大きい竹かごが五つ縛れる。緞1本に釣り針が600個ある。繚脚間の距離は2托（尋ヒロ）であり、1托は1.6 mである。別の種類の白魚緞は、五沈五浮という。その特徴は、23個の釣り針が花縄1本と浮筒一つに配置されることであり、主に近海で使われる。

鯊魚緞：緞身の直径は1 cmであり、伝統のものはカラムシで作られた。繚脚と釣り針の間に30-40 cmの銀絲がある。繚脚の間隔は4托であり、釣り針は20個ずつが1辦であり、5辦ずつが1籃である。1籃のサメ緞は一つの碇に配置される。サメ緞の釣り針は刺がなく、直径は0.5 cmである。

大、小黄魚緞：この地方で紅花魚といわれる。繚脚の長さは0.8托であり、釣り針は白魚の釣り針より小さく、長さが4 cmであり、先端が平たく、刺がある。一般的には50本の釣り針が、一つの碇に配置される。釣り針は、100個が1籃である。

滾鉤釣：餌のない釣り針である。釣り針の間隔は7寸であり、水流が激しいところで使う。釣り針は密集しているので、通過する魚がそれに引っ掛かる。近海の礁付近で使う。

泉州地区の手釣り業は、烏賊の手釣りを主とする。烏賊の手釣り（一本釣）は浮子がなく、釣り針が複数針である。釣具の縄の長さは30-40托であり、1950年代以前にはカラムシで作られ、それ以後は綿糸に代わった。

2) 網具

泉州地区で使われる網具は、張網、抄網、掩網、敷網、建網、刺網、囲網、掩網など8種類である。用途により、この8種類の下にもっと細かい分類がある。以下に簡単に紹介する。

張網類：張網類の漁網は定置網と通称され、桩、桁などで網具を水中に設置し、水流を活用して魚を捕り、典型的な受動型漁具である。適用できる範囲が広く、産量が高い。惠安地区には、張網類漁網が張網（俗称孝脚、五筒）、豎杆（俗称企桁）と筐架（俗称筐網、方網、大網）の3種類がある。晋江、石獅地区の言い方は、退繪、栓桁、四角框である。

抄網類：抄網類は、網兜、框架および手柄で組成される。1人で浅水区域において小雑魚を捕る

漁具である。

掩網類：俗称は手抛網、手撒網、手網である。岸辺で1人作業をする漁具である。

敷網類：岸敷網と船敷網という2種類がある。岸敷（俗称拳繪）は、主に岸辺の浅瀬で魚類を捕る。たとえば烏鯧魚網、敲罟網（大、小黄花魚を捕る）などである。

建網類：規模が大きい定置漁具である。沿海河口に設置し、水流に伴って移動する魚類を捕る。張網の作用と似ている。

刺網類：流刺網、定置刺網、囲刺網、掩刺網の4種類がある。泉州地区でよく使うのは、流刺網である。主に梭子蟹、馬鮫、白只、鱒魚、対虾、蟳を捕る。馬鮫と梭子蟹を捕る流刺網は、伝統的な刺網類漁具である。

囲網類：主に中上層と下層の数量が多い魚群を捕る。単船と双船二つの種類がある。地方でよく使うのは、大囲繪、小囲繪、帶魚繪である。

拖網類：惠安地区における風帆船拖網の俗称は漏尾、網仔、卡鳥、牽虾などがあり、伝統作業である。晋江、石獅地区には単拖、双拖、卡網（牽繪）、虾拖、大網拖（地拖網）などがある。拖網の作業は、単船拖網と双船拖網がある。たとえば九節虾を捕るのは、単船の作業である。

3) 漁船

主に大鍾（大型の船拖網漁船）、網艚（外定置船）、舢板（内定置、囲網および流釣船）、竹排（流釣）、漏尾、牽罟、囲罟船（揺罟）、算網船（算仔）、腿罟（網艚）、古仔、大排、釣船などがある。

以上の船、たとえば大鍾、漏尾、牽罟は、キールが12.15 m、船面が18 m、積載重量が20トンである。その他は、全部積載量が少ない船である。たとえば囲罟の積載量は1.5トン、古仔は1トン、算網と流刺網の積載量は2トンである。腿罟は少し大きく、長さが12.9 m、幅が2.7 m、高さが1.2 m、積載量が5トンである。鍾、漏尾、牽罟などの前帆と中帆のある船以外、一般的に一帆二櫓、あるいは一帆一櫓、一櫓二櫓である。大鍾は魚倉が10倉あり、他はすべて3倉であり、魚倉には蓋がない。

以上の内容は、一部分『晋江市志』、『石獅市志』と『惠安県志』を参考にした。

5. 海洋漁労の具体的な過程

海洋漁労は、漁業生産の一番重要な段階である。長期の労働過程に基づいて、漁民たちは最も合理的で最も科学的な漁労方法を考案した。残念であるが、それについての文献記載は少ないし、これに関する研究も多くはない。今回の大岞村と祥芝鎮でのフィールドワークでは、海洋漁労の具体的な過程は最も注目される内容の一つである。その中の重要な魚類を捕る方式、漁労道具の使用、人員の分業と提携などの問題と関連する。詳しい内容は、以下の通りである。

1) 白魚

泉州人は帶魚（タチウオ）を白魚という。そのため、帶魚を釣る海上作業を釣白と言う。伝統的な釣白方式は、様々な古い書籍に記載されている。たとえば『本草綱目拾遺』によると：「釣法：用大繩一根，套竹筒作浮子，順浮洋面，綴小繩一百二十根，每小繩头上栓銅絲一尺，銅絲头栓鉄鈎長三寸，即以帶魚為餌，未得帶魚之先，則以鼻涕魚代之，凡釣海魚皆如此。」⁽⁹⁾（「漁法は大繩一根を用いる場合、套竹筒で浮子を作り、海面近くに浮かべる。120本の枝繩を出し、枝繩は銅線1尺の先に3寸の鉄針を付けそれにタチウオの餌を付ける。タチウオの餌がない時には、鼻涕魚を代わりとする。海での

釣りはほぼこの方法による。』)

では、実際の操作過程はどのようになっているのだろうか。大岬でのフィールドワークを例にすると、使用された船は泉州、アモイ各地で一番使われた船型——釣槽である。釣槽は大小の分別があり、大きさを分別するだけでなく、船の上いくつのサンパンが入るかも大小を分別する方法である。20 m 前後の釣槽は 4、5 隻のサンパンを入れることができ、30 m 前後の釣槽は 10、11 隻のサンパンを収容することが可能である。

釣白作業を行う時に、サンパン 1 隻に 4 人が乗り、人々はそれぞれ分業がある。サンパンの中堵(真ん中)に座る人は船長であり、二手と呼ばれ、俗称は坐堵児である。その担当の作業は：①水の色と深さを観察し、温度を測り、魚群の海中の位置を判断し、海中に投げ込む釣り針の深度を決定する。②貼餌、つまり餌を置く。釣白の速度がとても速いので、貼餌の仕事を、技術を熟練した人に任せなければならない。そうでないと、産量に影響する。つまり、二手が担当する仕事は、作業過程の中で一番技術的な仕事である。

船頭の位置は、頭前と呼ばれる。頭前は閩南語で前の意味であり、主に担当する仕事は放縄と拈縄である。放縄は延縄釣を水中に置くことである。拈縄は、釣り針に捕った魚を取ることである。頭前は一般的に見習いが担任する。基本的に、すべてのサンパンに見習いが 1 人いる。船隊の中で、このような見習いは在笨と呼ばれる。在笨はサンパンで放縄と拈縄を行う以外、サンパンが魚でいっぱいになる時、魚を釣槽に積み卸しをし、塩漬けにする。

船尾左側の人は櫓大と呼ばれ、櫓をこぐ人である。サンパンの安全を保障し、風の強さがよくわかり、帰航する時に釣槽を探す。

船尾右側の人は殺餌と呼ばれ、俗称が三手である。主に担当する仕事は餌をつくることである。白魚の餌は生魚で作られ、作成は全部餌板の上で完成する。餌板は船尾に置き、その長さは 90 cm、幅が 20 cm、厚さが 3 cm である。餌をつくる刃物も、一定の標準がある。長さは一般的に 22 cm であり、手に持って軽く、切っ先が平らで鋭い。張国輝氏の話によると、昔はすべての殺餌刀は浙江省寧波市象山県石浦鎮の教場で買った。その後、大岬当地でも同様な殺餌刀が製造できるようになった。釣白の餌は随意に作ることはできず、一定の規格がある。一般的に、餌の長さは 18 cm、幅は 3-3.5 cm、厚さは 0.6 cm である。そのため、餌をつくる人は技術に熟練した人である。餌をつくる以外に、三手はときどき櫓大を替え、櫓をこぐ仕事を行う。櫓大が替えられてから、同様に餌をつくる仕事を行う。

釣白作業の過程で、最初は放縄である。放縄が完成してから、サンパンは縄の範囲以内で往復する。釣白は魚群の深度を非常に重視するため、全部の縄を置いてから、サンパンが最初に往復するとき、二手は成果により、筒縄の水中の深度を調整する。このような調整は非常に重要な段階である。最初に放縄する時、釣り鉤が海底の泥に入ったり、魚群の位置ではなかったりすることがよくある。繰り返し調整することによって、白魚を捕る最高の効率が保証される。

サンパンが移動する過程で、魚が針にかかれば、頭前は拈縄をし、縄を引く。二手は剥魚(魚を針から取る)、貼餌の仕事が完成してから、もう一度縄を放す。もし魚群の量が非常に多く、針にかかるのが速く、取る時間が少なければ、二手は縄の長さを調整し、釣り針の数を減らす。拈縄、剥魚、貼餌および放縄一連の動作の速度をコントロールできる範囲内にする。もし調整しなければ、まだ取らない白魚が周りの白魚に食われ、損失が発生する。

2) 烏賊 (イカ)

烏賊は光を好むという特徴があるので、烏賊を釣るのは夜間に行われる。月光や松明で照明する以外に、烏賊延縄釣の餌も蛍光を出し、烏賊を引きつけることができる。伝統的な烏賊の餌は、釣り針上方の縄に置き、材料は烏賊の骨(軟甲)である。餌を作る時に、烏賊の眼球を砕き、骨に塗り、発光する効果をさらに強める。しかし、現在使用している烏賊針は化学塗料を使い、入水してからすぐ発光し、烏賊を引き付ける。このように、伝統的な方法はもう使わない。

伝統の烏賊釣り方法は、「一人一条秦、一人一門釣」である。大船両側に烏賊を釣る人員がいる以外に、船尾両側に筏を数隻引き、筏の間を縄で結び、その上にも烏賊を釣る人員がいる。烏賊を釣るとき、大船は筏を引いて移動する。こうすれば烏賊がよく引ける。

3) 烏鰂 (クロアジモドキ)

長期の実践過程において、漁民たちは烏鰂の暗い環境が好きな習性を知り、ごぞで烏鰂を引きつける方法をあみ出した。烏鰂を捕るのは主に大鍾、漏尾、牽罾などの船形で、網具は箕のような罾網である。烏鰂を捕るのは6隻以上の筏の協力が必要である。1隻はごぞを引っ張り、烏鰂を引きつける仕事を行い、ごぞの下の烏鰂の数を密接に観察する。別の2隻の筏は、船上で網を張る時機を待つ。他の筏は周りで待ち、機会を窺う。烏鰂を引きつける筏は止まることなく移動し、ごぞの陰に十分な烏鰂が集まれば、大船に信号を発する。このとき、大船は網を張る筏を放ち、烏鰂を引く筏の路線に事前に罾網を設置する(罾網の一側面は水中に沈み、別の側面は水面に漂う。当地では水面に漂う側面を頂光と呼ぶ)。烏鰂を引く筏が頂光を通過するとき、烏鰂が網の中に入る。周りで待った3隻の筏がすぐに協力し、脚索(網に縛られ、網を取り返す縄)を引き抜き、水中に沈んだ網を水面へ取り返す。大船が近くに寄せると、網にかかった魚を大船へ積み卸す。

4) 鯊魚 (サメ)

鯊魚を捕ること、特に大鯊魚は大岬と獺窟(現在は浮山村と呼ばれる)の伝統的な仕事である。泉州の他の地方は捕る技術が足りないので、あまり見えない。大鯊魚を捕るのは特別で補助的な道具が必要であり、それは「勢」という大きい鉄製の釣り針である。「勢」の長さは70から80cmの間で、尾端に鉄輪があり、縄を結べば大鯊魚を引っ張ることができる。大鯊魚を捕るのは一般的に釣罾を使い、大きいサンパンと筏が協力する。サンパンや筏に、通常二つの大きな鉄釣り針を配置する。正常な状況で、大きな釣り針を使うとき、鯊魚の鰭を引っ掛け、熟練した人だけができる。漁民の経験により、大鯊魚を捕るとき、縄を放つのに天気の良い悪しを見なければならない。良い天気に長縄を放ち、悪い天気に短縄を放つ。これは作業用のサンパンや筏の安全性と関係がある。悪い天気に、船の安全を確保するのは一番重要であるので、縄を縮め、針の数を減らし、産量は少なくなるが、安全性は保障できる。

5) 大黃魚、小黃魚

泉州地区で敲罾と呼ばれる作業は、主に大、小黃魚のような音波に影響されやすい魚類を捕るためである。中国沿海の他の地区にも同様な捕る方式がある。敲罾の歴史は長くないが、木帆船時代を経ており、深く研究するに値する。敲罾は多くの船での作業であり、協力するサンパンは30隻以上である。蔡久芳氏の話によると、100隻以上のサンパンが同時に作業を行う状況も少なくなく、その場面は非常に壮観である。作業を行うとき、大船を中心としてサンパンは分散し、半円形の包囲圏に形成する。サンパンと大船の距離が、サンパンの数量に定められる。多いときは、サン

パンは大船との距離が2、3海里でも正常である。サンパンは分散してから、船員が含檀（コシアテ——帆柱を支える船梁）に固定された“罟”を叩く。“罟”は柯木（シリブカガシ）で作られ、長さが2 m半、幅が30 cm、厚さが12 cmである。“罟”の音を出せば、比較的小さい魚を意識不明にするか、あるいは死亡させることができる。罟の音を出すと同時に、サンパンは次第に大船へ寄り、魚も大船へ移動していく。最後に、大船とサンパンの包囲圏が形成され、網を放って魚を捕る時機になる。罟を鳴らすのは絶滅する漁労方式であり、禁止されたが、中国沿海における大、小黄魚の跡もなくなってしまい、これは痛ましい教訓である。

6) 蝦（エビ）

蝦を捕る網は蝦拖網という。昔は網の他に、竹篾で編まれる蝦籠も使った。蝦拖網の口は四角形、高さが1 m、長さは船の大きさに伴って変える。蝦拖網の口を土層に沈める部分には、足り分量の鉛を入れる。そのため、作業を行うとき、網は漂うことがない。網口上端の両角に縄があり、縄の別的一端を船に結ぶ。蝦は一般的に土層の表面に生活しており、蝦拖網は移動するとき、蝦が驚き、全力で上へ泳ぎ、網の中に入る。蝦を捕るとき、一般に砂地が平坦な海底を選ぶ。

6. 結語

いわゆる山の者は山に糧を求め、海の者は海に糧を求める。泉州は沿海都市として、古くから漁業が発展している。当地の漁民は海を田にし、長期に海洋と関わってくる中、当地に合った漁業生産技術や道具を創造し、今まで続いている。残念なのは、本稿が今回行ったような専門的研究が、今までほとんどないことである。本稿は、地方志史料とフィールドワークの資料を合わせる方法を採用し、泉州地区における伝統的な漁業生産技術および具体的な操作過程を系統立てて整理した。その中から、早くも古代に、泉州沿海の漁民たちは季節漁労を行い始め、年を単位としての漁労周期を創造した。泉州近海の漁業資源が少ないので、今まで、泉州の漁民は地域にまたがる伝統的漁労を保っている。漁民たちは、生活実践の中で創造した漁業生産道具が当地の海洋環境、漁業生産方式および習慣などと密接な関係にあり、地方の特徴を持っており、泉州沿海漁民の創造力と知恵を十分に現している。泉州地区で常用される漁船を研究する中で、その漁船は生産の需要を達成するために製造されたことがわかる。これは、漁業生産と造船との関係を研究することについてある程度助けになると考えられる。漁業生産の具体的な過程内容については、フィールドワーク資料の整理から得ることができた。漁民がどうやって漁業生産を進行するのかを深く理解することは、漁民生活の一面を理解することでもある。それも、地方志の中で欠乏している内容である。もちろん、本文の中で紹介したのは、伝統的漁業生産の一面である。漁民が海に出る前の購買と整備、漁労後の海産物の処理方法と販売ルート、漁船上の人員配置、分業および、収益の分配などの問題は、今後の研究方向である。

注

- (1) 惠安県地方志編纂委員会編、『惠安県志』、方志出版社、1998年、265-267ページ。
- (2) 晋江市地方志編纂委員会編、『晋江市志』巻七「水産」、三聯書店上海分店出版社、1994年、267ページ。
- (3) (明) 叶春及撰、『惠安政書』「崇武所城志」、福建人民出版社、1987年、41ページ。
- (4) 徐栄、「我国歴史上沿海地区的伝統漁業」『古今農業』、中国農業科学技術雜誌社、1992年、74ページ
- (5) (明) 叶春及撰、『惠安政書』「崇武所城志」、福建人民出版社、1987年、41ページ。
- (6) 晋江市地方志編纂委員会編、『晋江市志』巻七「水産」、三聯書店上海分店出版社、1994年、265ページ。
- (7) 清道光『厦門志』、鷺江出版社、1996年、135ページ。
- (8) 福建省革命委員会水産局編、『福建省群衆漁業漁場図集』、1972年、13頁。
- (9) (清) 趙学敏、『本草綱目拾遺』巻十「鱗部」。

追記

原訳は、張昌昌氏に依頼したが、小熊がそれを監訳した。魚名や網名など専門用語の確認は、昆政明先生と愈鳴奇さんに依頼した。(小熊誠)